

# ブラッドフォード卿の試練、 第1話

ある王国の東側の国境近くに、村がありました。がんばりなお城に守られ、村人たちはそこで働きながら、平和に暮らしていました。城主は、騎士のブラッドフォード卿でした。ブラッドフォード卿は、物静かで賢い騎士で、行動したり発言したりする前に、人から聞いたり、注意深く調べたりするのをよしとしていました。王様はそういった人格ゆえに、王国の中心から遠くはなれたこの地域を見守る者として、ブラッドフォード卿を任命したのでした。

王国のこの地域の平和を守る者としてブラッドフォード卿に任された責任は、重いものでした。住民が安心して平和のうちに暮らせるのは、お城があって、武装兵が待機しているからだけでは、ということ、ブラッドフォード卿はよく理解していました。人々の暮らしが守られていたのは、遠くはなれたにぎやかな首都に住む、王様の支持と保護が約束されていたからにほかならないのです。

ある日のこと、一人の村人が緊急事態を知らせにお城にかけこんで来ました。このことで、ブラッドフォード卿と部下たちがどれほど王様を信頼しているかが、試されることになったのです。

その村人の名前は、メイベルと言いました。メイベルはもう長年、村の近くの国境沿いのとげに一人で暮らしています。村人たちは、メイベルを「森の女賢者」と呼んでいました。



メイベルはブラッドフォード卿に通告  
しました。「わたし、見たんです。武装兵  
たちが森の中をこっそりと移動しな  
がら、わたしの家の方向に向かって来る  
のを。最初はほんの数人のとうぞくか  
何かだと思ったので、出て行っておど  
かそうとしました。ところが、近づいて  
みると、もっと大勢の兵隊たちが小川  
に沿ってやって来るのが見えたんです。  
みんな、よろいを身に付けて、軍旗も  
持っていました。それで、最初にわたし  
が見た兵隊は、これからとうげをやっ  
て来ようとしていた大軍のていさつ隊  
だったと分かったんです！」

ブラッドフォード卿は、彼女の話を  
聞いてじっくり考えました。これから  
どうしたらいいのか、おどろいている  
女の人に次から次へと質問をして、  
もっとくわしいことを知ろうとしました。

「わたしが見たのは、それだけです。」  
と、メイベルが答えました。「軍隊を見  
かけて、わたしは真っすぐここへ飛ん  
で参りました。とちゅうで敵のていさ  
つ隊に止められそうになりましたが、  
何とかにげ切って、ここまでかけつ  
たのです。」

「それは、たいぎであった。」と、ブラッ  
ドフォード卿は言いました。



ブラッドフォード<sup>きょう しろ</sup>は、お城の<sup>しゅ</sup>守衛官と隊長<sup>えいかん たいちょう</sup>に向かって<sup>む</sup>言いました。  
「ミルフォード<sup>しやうしゅうけいほう</sup>を<sup>だ</sup>出すのだ。兵隊<sup>へいたい</sup>を送り出して、畑<sup>あき</sup>にいる者も森<sup>もり</sup>にいる者も、一人<sup>ひとり</sup>残らず<sup>のこ</sup>すべての村人<sup>むらびと</sup>たちを集め<sup>あつ</sup>、1時間<sup>じかん</sup>以内に城<sup>しろ</sup>の中<sup>なか</sup>に入らせよ。それまではずっと、警報<sup>けいほう</sup>を出し続けるのだ。」

お城<sup>しろ</sup>の最も<sup>もっと</sup>高い塔<sup>たか</sup>の上<sup>とう</sup>から、ミルフォード<sup>しやうしゅうほう</sup>は召集<sup>ふえ</sup>用の笛<sup>ふえ</sup>を吹き鳴らしました。このような緊急<sup>きんきゅう</sup>の時にしか使わ<sup>つか</sup>ない、大きく低い音<sup>おと</sup>の出る、特別な<sup>とくべつ</sup>笛<sup>ふえ</sup>です。吹き鳴らすたびに等間<sup>とうかん</sup>隔<sup>かく</sup>のリズムでドラム<sup>どらむ</sup>をたたいて、地域<sup>ちいき</sup>中に警報<sup>けいほう</sup>の音<sup>おと</sup>をひびき渡<sup>わた</sup>らせました。

「敵<sup>てき</sup>が攻<sup>せ</sup>めて来るぞ。持ち運<sup>もちこ</sup>べるだけの物<sup>もの</sup>を持って、すぐ<sup>ま</sup>に城内<sup>じやうない</sup>広場<sup>ひろば</sup>に集合<sup>しゅうごう</sup>せよ！」兵隊<sup>へいたい</sup>たちは村中<sup>むらじゅう</sup>や周辺<sup>しゅうへん</sup>の地域<sup>ちいき</sup>に出<sup>い</sup>て行<sup>い</sup>って、村人<sup>むらびと</sup>たちに呼びかけました。

まもなくすると、男<sup>おとこ</sup>の人も女<sup>おんな</sup>の人も子ども<sup>こ</sup>たちも、みんな服<sup>ふく</sup>や寝具<sup>しんぐ</sup>や食料品<sup>しょくりょうひん</sup>などの荷物<sup>にもつ</sup>を持って、村中<sup>むらじゅう</sup>からブラッドフォード<sup>きょう</sup>卿<sup>しゅ</sup>のお城<sup>む</sup>へ向<sup>む</sup>かってや<sup>き</sup>って来<sup>き</sup>ました。



むらびと　　しろ　ひろ　ば　あつ  
村人たちが お城の 広場に 集まりつつある ころ、ブラッドフォード<sup>きょう</sup> 卿は 王様<sup>おうさま</sup>あてに 手紙<sup>てがみ</sup>を 書き、使者<sup>か</sup>に たくして  
はやうま<sup>はやうま</sup> おく<sup>おく</sup> だ  
早馬で 送り出しました。

おうさま  
王様、

ふ　い　　てきぐん　むら　せ　　き　　げんざい　やま　ぞ　　せつきんちゆう　むらびと　ぜんいん  
不意に 敵軍が 村に 攻めて来ました。現在 山治いに 接近中です。村人は 全員、  
しろ　なか　ひ　なん　　しろ　　てきぐん　ほう　い  
城の 中に 避難しています。ですが、城は まもなく 敵軍に 包囲されることでしょう。  
いま　　きけん　　すく  
今すぐ、この 危険から お救ください。

おう  
王の しもべ、ブラッドフォードより

し　しゃ　うま　の　もん　　で　　むらびと　　かんせい　あ　　おうさま  
使者が 馬に 乗って 門を かけ出ると、村人たちの 歓声が 上がりました。「王様、ばんざい！」

さい　ご　　むらびと　　しろ　　ぼし　わた　　てき　へいたい　み  
まもなくして 最後の 村人たちが お城の はね橋を 渡ると、敵の 兵隊が 見えてきました。

てきぐん　ぎょうれつ　みち　　くだ　　く　　きょう　めい　　こう　し　ど　　ぼし　あ  
敵軍の 行列が 道を かけ下って来ると、ブラッドフォード卿が 命じました。「格子戸を おろして、はね橋を 上げよ！」

てきぐん なか ひじょう はら た へいたい いき き  
敵軍の中から、非常に腹を立てた兵隊がはげしく息を切ら  
せながら、お城の堀までやって来ました。そして、すぐにブラッド  
フォード卿を呼んでさげび始めました。

ブラッドフォード卿がお城の高い所から顔を出すと、すぐに敵  
がだれか分かりました。20年も会っていない、メレクという男  
です。メレクは「悪党プリンス」として国中に知れ渡っていました。  
なんねん むかし おうさま とち くんしゅ  
何年も昔、王様がメレクをその土地の君主にできなかったため、  
かれ はら た 立て、いつか しかえしにもどって来るからな、とちかいな  
がら、国を出て行ったのでした。

「メレクよ、久しぶりだのう。一体、何の用だ？」と、ブラッドフォ  
ード卿が下にいる男にさげび返しました。

あくとう だ じぶん  
悪党プリンスはいら立ちながらさげびました。「おれは、自分の  
ものをと にかえしに きただけだ。ぶ きを す 捨てろ！ ていこうせずに  
とち あ わた 村人の 身の ためだぞ。」

すると、ブラッドフォード卿が答えました。「お前のことなど、こ  
わいものか。おう にはすでに 助けを 求めている。すぐにでも、ちからづよ  
えんぐん が来るだろう。お前のほうこそ、家来を連れて 帰ったほうが  
いいぞ。」

けれども、あくとう 悪党プリンスは っこうに ひるみません。おこって 言  
い返してきました。「降伏しないなら、村もろとも 滅ぼしてやるから  
な。そして、おまえも 村人も、おれ様の どれいに してやる！」



お城の中では、ブラッドフォード卿が村人に現状を説明しました。「悪党プリンスは危険な男だ。何年も昔自分の思い通りにならなかった仕返しに、できる限り大きな損害を国に与えたいだけなのかもしれない。やつに降伏するなんて、もつてのほかだ。われわれはただ、王様が軍を率いて助けに来てくださることを信じて待たねばならない。」

村の長老の一人が言いました。「確かにそうですが、早く王様が来てくださらなければ、敵がわたしたちの土地も家もめちゃくちゃに荒らすでしょう！ 木々を切りたおし、家畜を殺すでしょう。あやつがこの辺りにいる限りは、何をされるかわかったものではありません。」

最初に敵の軍隊を見つけて知らせに来た、森の女賢者メイベルが口を開きました。「そのように弱腰になっていては いけません。そもそも、どうしてわたしたちが王様を信頼しているのか、考えてもみてください。正当な理由があるのでは ありませんか？ せっかちになって信頼をぐらつかせるのではなく、王様が何かしてくださるのを待とうでは ありませんか。」



お城は 今や、悪党プリンスの 軍隊に 包囲されています。もう 使者を送り出すことは できません。少なくとも、人が お城の外に 出ることは できないのです。それで、ブラッドフォード卿が 書いた 次の手紙は、伝書バトの 足に くりつけられて 送り出されました。

おうさま  
王様、

敵は 今や、われわれの 城を 包囲しています。感謝すべきことに、村人は 全員、城内で 無事です。

攻めてきた 敵軍を 率いているのは、悪党プリンス、メレクです。メレクは、この 地域を 取り返すために 来た、降伏せよ、と 要求しています。

現在、われわれは 強固な 城壁に 守られているので 無事です。弓の 射手や 見張りも 配備されています。今しばらくは 安全ですが、敵が わたしたちの 土地を 荒らすのではと 心配です。いつまで 持ちこたえられるかは 分からない 状態です。

手紙を 受け取った 王様は、深い 関心を いただきました。部下は、村が 直面している 困難と 懸念を つぶさに 報告しました。村人は、王様が 問題を 解決してくださるのを 頼みに しているとの ことでした。

それらの 情報を 受け取り、王様は、この 形勢を 一変させるため、ある 計画を 思いつきました。

けれども、王様の 計画が 進められている間、城内では 王様が 何を しているのか 分からないので、中には 心くなる 村人たちも 出てきました。

「何て おろかな ことを するんだ！ 敵の 軍勢  
は 多すぎる。出て行っても、殺されるだけだぞ。」  
ブラッドフォード卿が さげびました。

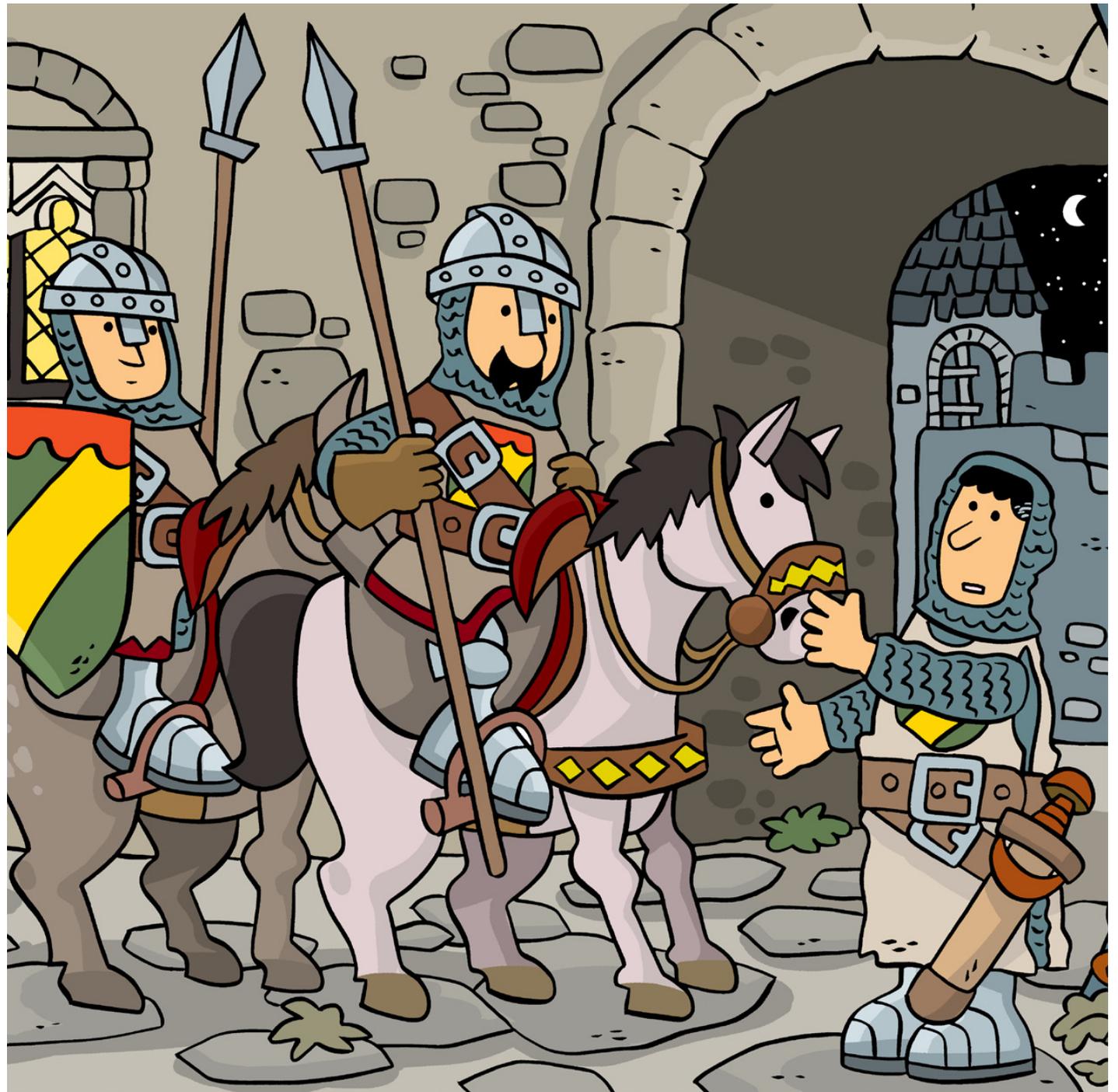
真夜中の 出来事でした。敵に 夜討ちを かけよ  
うと、ミルフォード守衛官が 一にぎりの 兵隊と  
出て行こうと しているのを、ブラッドフォード卿  
が たまたま 見つけて 止めたのです。

「われわれは、王様に 助けを 求めたのだ。信  
じて、王様の 来られるのを 待つべきであろう。  
生きて この 危機から 脱出するには、ほかに 道  
がないのだ。」

「ですが、もし 王様が おいでに ならなかった  
ら、どうするのでしょうか？ 村人たちに、何と 説明  
するのですか？」と、ミルフォードが 言いました。

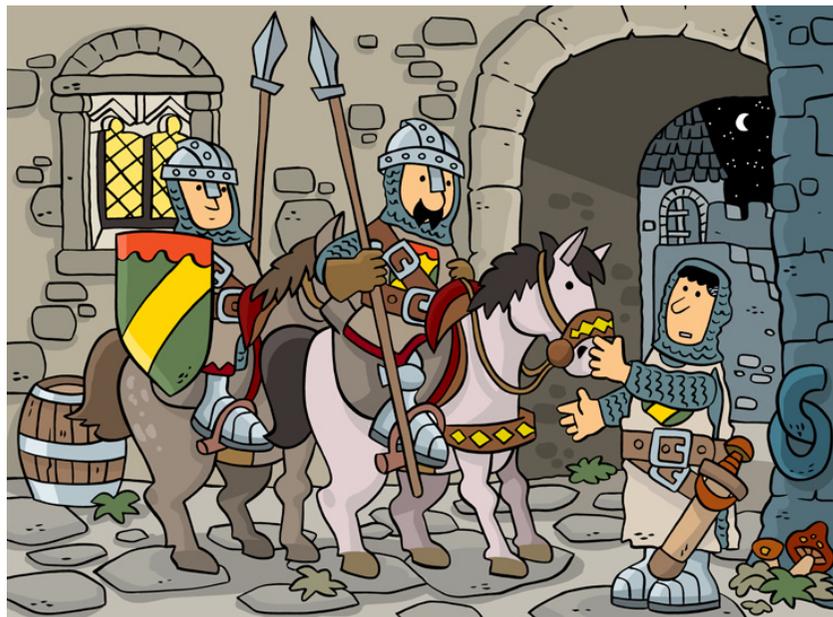
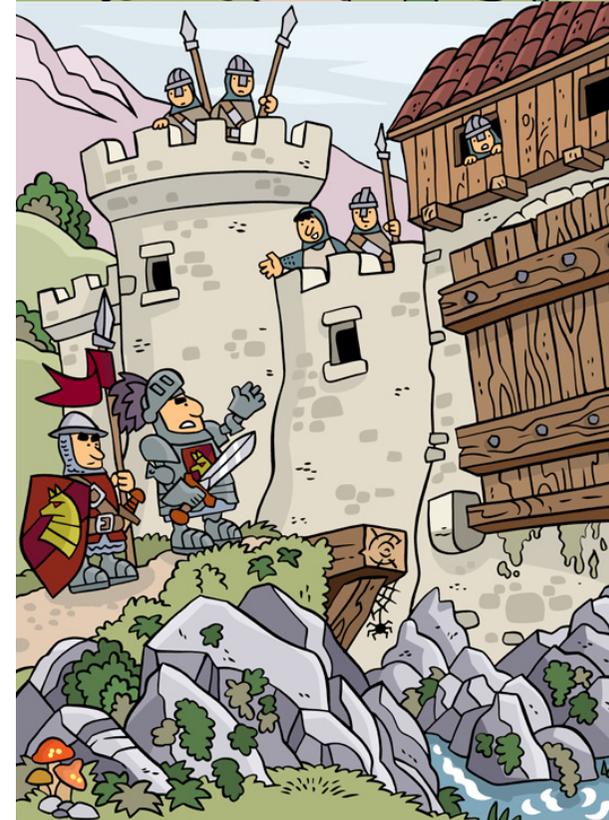
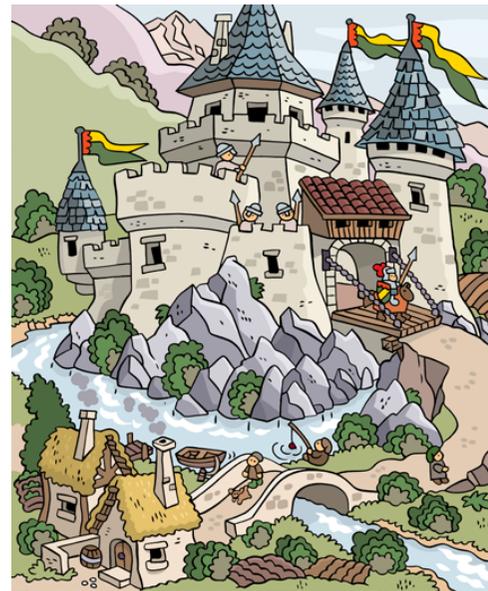
たまたま その時は ミルフォードを 止めること  
が できたものの、もし 王様が すぐに 来られな  
いなら、自分たちの 兵隊たちまでもが はなれて  
いってしまうかもしれないという、さらに 危機  
的な 状況に あることが、ブラッドフォード卿に  
は 見て取れました。

つづ  
(続く。)



# ブラッドフォード卿の試練、 第2話

これまでのお話 : ある王国の中心から遠くはなれた  
 国境沿いの村とお城が、悪党王子メレクに攻撃されました。  
 城主であるブラッドフォード卿は、王様に使いを送って  
 援軍を求めました。ところが、援軍がすぐに来ないために、  
 村人たちは不安に感じ、自分たちだけで事を  
 成そうとする者まで出てきてしまいました。



その翌日のこと。村人がお城に避難してから1週間がたって、王様が大きな軍を率いて到着しました。

悪党王子メレクは内心感心しましたが、そしらぬふりをしました。

「ずいぶん長くかかったものだな。」話し合いのために王様と面と面を合わせたメレクが言い放ちました。

敵の無礼に立腹した王様が言いました。「お前には、こんな所に現れる権利などないはずだ。ここはわが王国の一部だ。わが民を守るために、わたしは来た。お前はさっさと帰るがよい。」



すると、悪党王子が さげびました。「それなら、わたしを 去らせてみよ！ わたしは 戦など、ちっとも こわくは ないぞ！ かかって来い。この村が 本当は だれの ものか、決着をつけようじゃ ないか。」

この 様子を お城の 塔や 城壁の 上から 見守っていた 人たちは、悪党王子の 無礼さに 息を のみました。

「王様に 戦を いどんで くるとはな！ 今こそ、王様が 目に物 見せてくれるわ！」ミルフォード守衛官が 大声で 言いました。

「ブラッドフォード卿、あなたこそ 最初から ずっと 正しかったのです。王の 援軍なしに 何か できるなど と思った わたしが 浅はかでした。」と、ミルフォードが 言いました。

村人たちは、悪党プリンス軍が 負けるのを 今か今かと 1日中、熱心に見守っていました。

けれども、王様が だれも 予期しない 行動をしたために、みんなは 混乱します。侵略軍を 攻撃する 代わりに、王様と その軍は、お城と 悪党王子の 軍隊を 見下ろせる 場所に 野営しながら、じっと そこに とどまった ままだったのです。





なんにち す 高慢さ と 横柄さは だんだんと 度を 増して きました。「お前たちの 王は、腰ぬけじゃ ないか！ おれの 軍が 強すぎると 分かったようだな。弱虫の 王など 当てに せず、降伏しろ。」

お城の 広場に いた 人たちも、日に日に 気がかりに なってきてしまいました。ブラッドフォード卿は、みんなに じっと しているように 命じました。「王様は、われわれの 難儀を ご存じだ。今すでに ここに いらっしゃるのだから、われわれを 見捨てる わげが ないではないか。」

王様が 全く 攻撃に 出ようと していないことで、お城の 中に 避難している 村人たちの 気は 休まりませんが、王様は まちがっていた わけでは ありません。ていさつ兵や 情報集めの 兵を 大勢 送り出し、毎日 新しい 情報 を 受け取っていました。敵軍の 中に さえ おとりの ていさつ兵が いて、王様の 戦略が うまく っていると 分かっていたのです。

ある朝、王様の 兵たちが テントを たたみ、荷物を まとめているのを お城から 見た 人たちは 心配に なりました。ことも あろうに、その後 王様の 軍隊は 列を 成して 撤退してしまい、人々は ショックを 受けました。

腹を 立てた ミルフォード守衛官が 声高に 言いました。「王様は、一体 何を しておられるんだ？ われわれを 助ける 力が ないのだろうか？ われわれの ことなど、どうでも いいのだろうか？」



「王様は 何か、他のことの方 が もっと 重大だ と 思われたのかも しない。」と、ある人が 言いました。

「われわれは、二の次なのだろうか。ほかの 場所から もっと 緊急な 要請が あったのかも しないぞ。」もう一人も 言いました。

「このような 大変な 時だから、王様は きつと、とても ご多忙なのに ちがいない。われわれは、自分たちだけで 戦わねば ならないことを 受け入れねば ならないのだ。」

メレクが せせら笑いながら 言いました。「ほら 見ろ！ お前たちの 王が、にげて行くじゃ ないか！ そろそろ 降伏するんだな。まず 王の 軍隊を やっつけたら、お前たちを 攻め落としに もどるからな。」そのような 強がりとは 裏腹に、悪党王子も その 軍勢も、その日は ずっと、自分たちの 防備を 固めた 野営地から 一歩も 出ようとは しませんでした。

その日の 夜の ことです。悪党王子の 野営地から、ただならぬ さわぎが 起きているのが 聞こえました。城壁の 上から 見張りを していた 兵たちは、一体 何事かと やみに 向かって 目を こらしましたが、たいまつが いくつか 見えるだけで、ほかには 何も 見えません。夜が 明ける ころには、辺りは 今までに ないほど 静かになっていました。

午前中ずっと様子を見た後、ブラッドフォード卿は自分のていさつ兵を率いて、何が起きたのかを調べに行くことにしました。「連れて行くのは数人だけでいい。もし何かが起こってすぐに撤退しなくてはならなくなったら、少人数のほうがすばやく城の広場にもどって来れるから。」と、ブラッドフォード卿は部下に言いました。

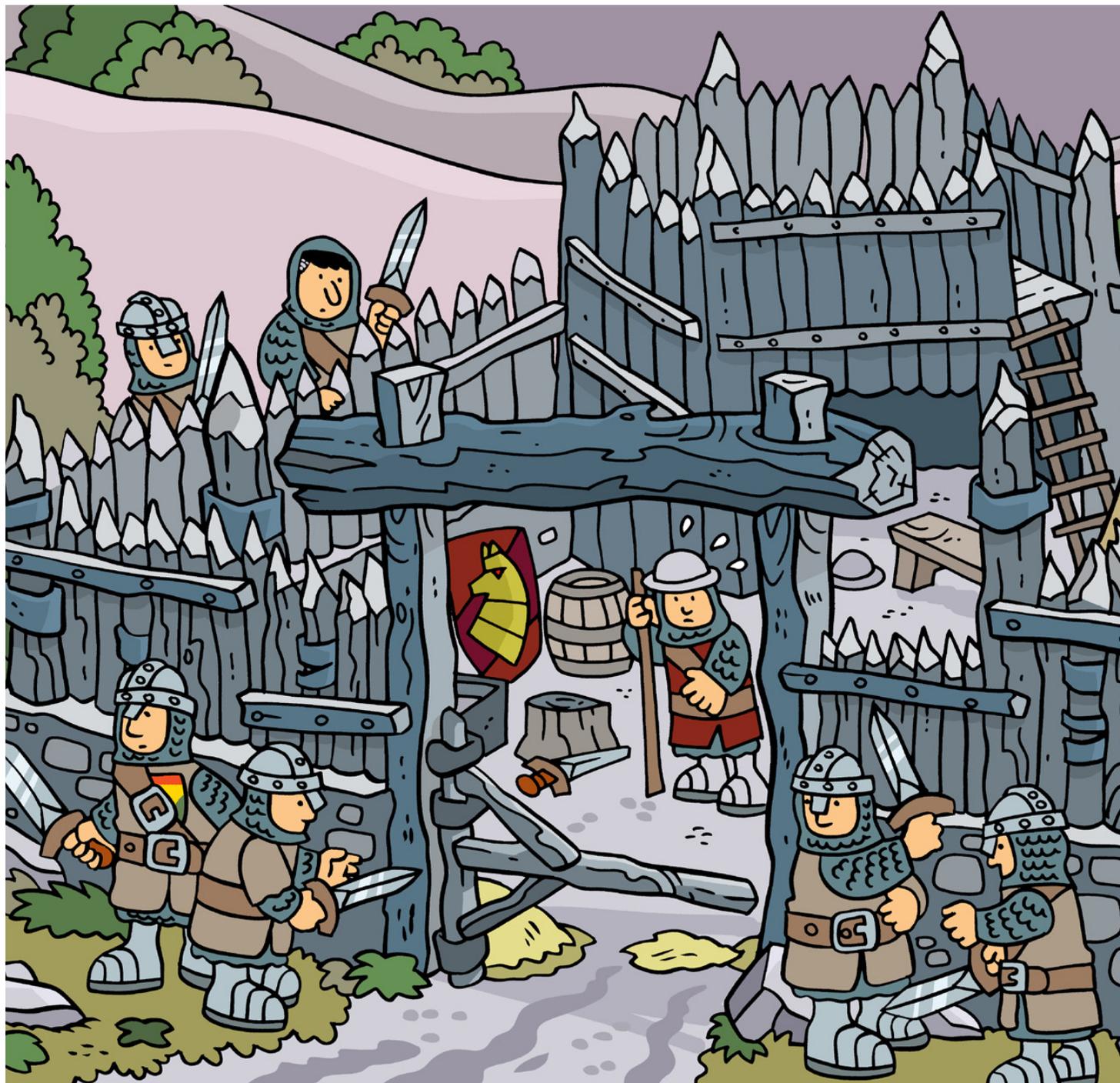
ブラッドフォード卿は真っ先に敵の防御壁をよじ登って、敵の野営地をのぞきこみました。おどろいたことに、野営地は大あわてで撤退した軍に見捨てられたと見えて、めちゃくちゃになっていました。一人の武装兵が野営地をうろついていたので、ブラッドフォード卿がひそかに後ろから近づき、その兵を取りおさえました。

「降参する!」と、その兵がさげびました。

「一体、何が起きているのだ?」ブラッドフォード卿が問いました。

「わ・・・分かりません! わたしは熱を出してふせっていましたが、朝目を覚ましたら、だれもいなかったのです! わたしは、置いてきぼりにされたんです!」その兵はなみだながらに答えました。

「こいつをつかまえている。わたしが調べて来る。」と、ブラッドフォード卿は部下に言いました。





いくつか残っていたテントも、空でした。野営地は見捨てられていたのです。ほっと安心したブラッドフォード卿は、ていさつ隊を引き連れてお城にもどり、みんなに宣言しました。「事態は収まった。包囲していた敵軍は、撤退したのだ。」

まもなくすると、村人たちはお城を出て、自分たちの農場や家へもどって行きました。辺りは散らかっています。特に、敵軍が進軍してきた所は、めちゃくちゃになっていました。けれども、直したり新しく取りかえたりできないようなものはありませんでした。見捨てられた敵軍の野営地から集めた資材が大いに役立ちました。

ブラッドフォード卿は、すぐにでも旅立たねばならないと分かっていました。王様と話さねばならないからです。長年の間、彼は王様への忠誠を固く守ってきましたが、この出来事で、ブラッドフォード卿はどうしても分からないことへの答えがほしかったのです。

村人たちがお城を出て自分たちの家を直すなどし始めると、ブラッドフォード卿は後をミルフォード守衛官に任せ、お城を出て早馬で国の首都へと急ぎました。

ブラッドフォード卿が首都のお城に着くと、家令がお城の



庭園で待つように、王様はそこで会われるから、と言いました。

お城の庭園は美しい所でした。果樹園にバラ園、プールにふん水と、そこに来た者ならだれもがその美しさに目をうばわれるような場所でした。その美しさを十分満喫しないうちに、王様が小さな門をくぐりぬけてこちらへやって来るのが見えました。

「ブラッドフォード卿よ！ よくぞ来た。」さっと歩み寄りながら、王様が声高に言いました。

「悪党王子の件では、災難じゃったのう。やつがいつかもどつて来るとは分かっていたが。」王様は昔の事を思い出すようなまなざしで言いました。「だが、それで事がたやすくなるわけではない。ただ、お主の知らせがすばやく届いたおかげで、村をできる限り早く解放するための行動に移れたことは、うれしい限りじゃ。お主の部下や村人たちが、この災難から立ち直りつつあるといいのだが。」

ブラッドフォード卿は、足元を見つめるばかりです。

「それで、友よ。何が言いたいのか、申してみよ。えんりよはいらぬぞ。」と、王様がたずねました。

「はい、王様。王様は、われわれを救ってくださったようにおっしゃっておりますが、われわれの見たところでは、何と申しますのか、王様は 何も して下さらなかったように見えるのです。城の広場にかくれているわれわれはそのまま、ただ、運良く悪党王子がついに あきらめて 自ら 撤退していったけのように思えるのですが。」

すると、王様は なみだを 浮かべ、あわれみに 満ちた 声で 言いました。「ああ、ブラッドフォード卿よ！ お主や 村人たちが たえしのばねば ならなかった 困難を 考えると、実に 気の毒であった。お主らの 命や 家が このような 危険に さらされたのは、全くもって ひどい 出来事であった。」

「だがしかし、わたしが 約束を 守ったことは 知ってほしい。わたしは しばしば、民が 理解できないような 方法で 物事を するが、必ずしも その 理由を 明かせる とは 限らないのだ。」





「ただ、<sup>こんかい</sup>今回はわたしの<sup>い</sup>言うことが<sup>りかい</sup>理解できよう。  
お主<sup>ぬし</sup>はわが<sup>ちゆうじつ</sup>忠実なしもべだ。これを<sup>し</sup>知れば、ほかの  
もの<sup>もの</sup>たちもわたしが<sup>ものごと</sup>いかに<sup>な</sup>物事を<sup>はんたん</sup>成すか、その<sup>しんらい</sup>判断を  
信頼するようはげましてくれるであろう。

まずは、<sup>ぐんたい</sup>軍隊を<sup>あつ</sup>集めるのに<sup>じかん</sup>時間が<sup>きし</sup>かかった。騎士  
や<sup>へいたい</sup>兵隊たちの<sup>おお</sup>多くが、<sup>かくち</sup>各地を<sup>まも</sup>守るために<sup>ではら</sup>出払っておっ  
たからのう。わたしと<sup>とも</sup>共に<sup>しんぐん</sup>進軍するよう<sup>しょうしゅう</sup>にとの<sup>めいれい</sup>召集  
命令に<sup>おう</sup>応じるには、<sup>じかん</sup>それなりの<sup>じかん</sup>時間が<sup>きし</sup>かかったのじゃ。

そして、<sup>ぬし</sup>お主の<sup>むら</sup>村へ<sup>む</sup>向かった。<sup>あくとう</sup>悪党プリンスとその  
<sup>ぐんぜい</sup>軍勢に<sup>ま</sup>真っ向から<sup>たいけつ</sup>対決するため<sup>にな</sup>。

<sup>あくとう</sup>悪党プリンスは、<sup>じぶん</sup>自分たちの<sup>むら</sup>とりでを<sup>きづ</sup>村に<sup>しろ</sup>築き、<sup>しろ</sup>城を

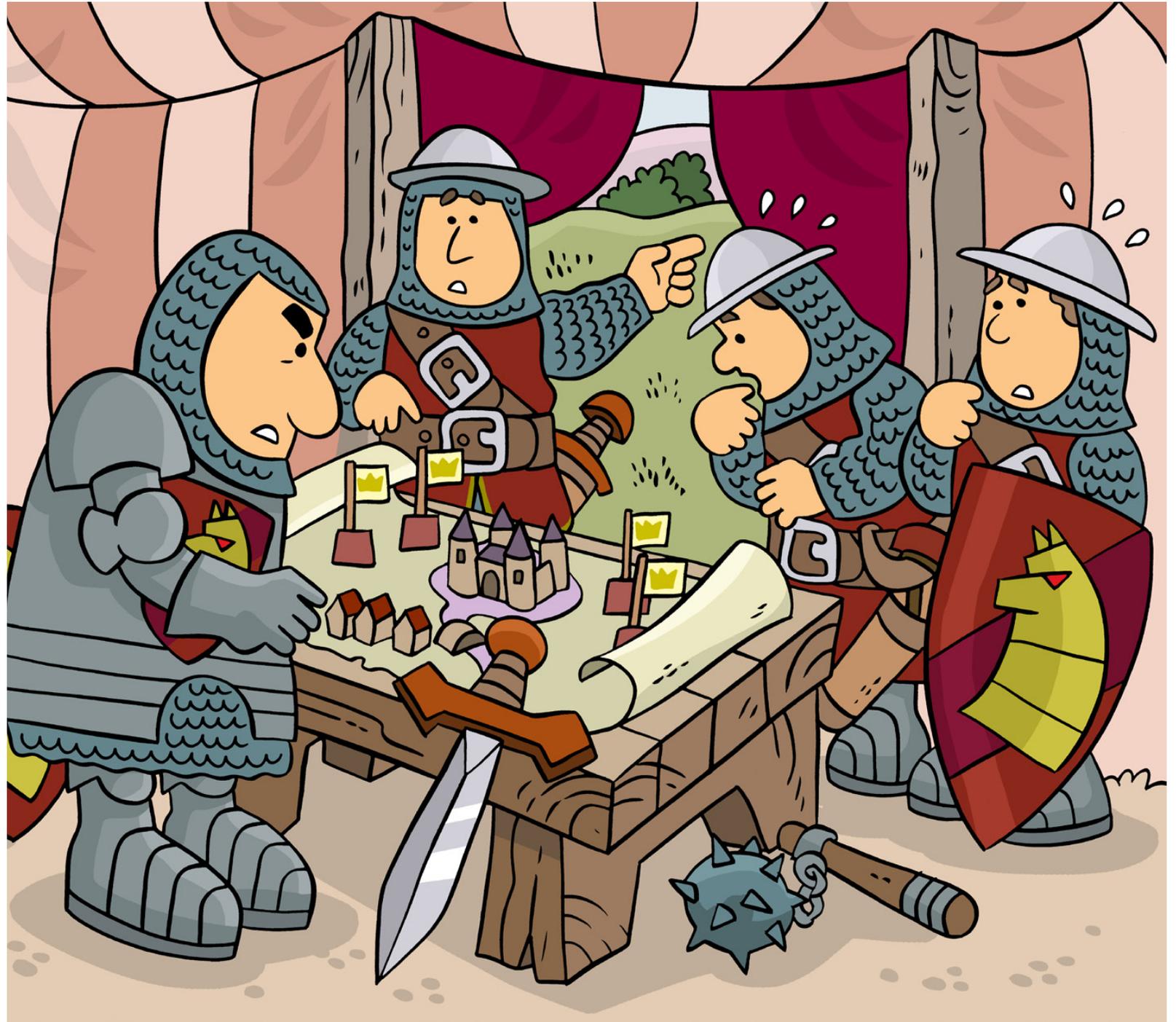
<sup>ほうい</sup>包囲して、いつでも<sup>たたか</sup>戦える<sup>たいせい</sup>態勢を<sup>ととの</sup>整えていた。わが<sup>ぐん</sup>軍  
が<sup>てきぐん</sup>敵軍を<sup>ちよくげき</sup>直撃していたなら、<sup>か</sup>勝つことは<sup>できた</sup>であ  
ろうが、<sup>あくとう</sup>悪党プリンスが<sup>きず</sup>築いた<sup>とつば</sup>とりでを<sup>とつば</sup>突破するには、  
かなりの<sup>じかん</sup>時間<sup>くせん</sup>苦戦すること<sup>にな</sup>っていたであろう。そ  
うすると、<sup>ぬし</sup>お主らは<sup>なんしゅうかん</sup>さらに<sup>あいだ</sup>何週間もの<sup>じょう</sup>間、<sup>じょう</sup>ろう城する  
こと<sup>にな</sup>りかねなかつたのじゃ。その上、<sup>うえ</sup>戦で<sup>いくさ</sup>土地も<sup>とち</sup>  
ひどく<sup>あ</sup>荒らされてしまうこと<sup>にな</sup>る。

メレクは、<sup>じぶん</sup>自分らの<sup>きず</sup>築いた<sup>なか</sup>とりでの<sup>なか</sup>中に<sup>ぐん</sup>わが軍を  
おびき入れて<sup>い</sup>袋<sup>ふくろ</sup>だたきに<sup>しよう</sup>しよう<sup>と</sup>とねらっていたが、わ  
れわれは<sup>て</sup>その<sup>の</sup>手には<sup>乗</sup>らなかつた。われわれが<sup>やつ</sup>やつに  
<sup>ゆうり</sup>有利な<sup>じょうけん</sup>条件<sup>ひら</sup>ではなく、<sup>とち</sup>開けた<sup>たたか</sup>土地で<sup>たたか</sup>戦おうと<sup>してい</sup>  
ることをメレクは<sup>さと</sup>さとつたのじゃ。



さて、そのころまでには、わが  
情報網<sup>じょうほうもう</sup>たちからの報告<sup>ほうこく</sup>で、悪党<sup>あくとう</sup>  
プリンスとその軍勢<sup>ぐんせい</sup>が、わが軍<sup>ぐん</sup>の  
強い歩兵<sup>つよ へい</sup>たちやすばしこい騎士<sup>きし</sup>  
らを相手に開けた土地<sup>あいて ひら とち</sup>で真っ  
向から戦うほどの勇気<sup>ゆうき</sup>は持ち  
合わせていないということが分  
かっていた。つまり、わが軍<sup>ぐん</sup>がそ  
ばにいる限り、やつの軍勢<sup>ぐんせい</sup>は自  
分<sup>ぶん</sup>たちの強固<sup>きょうこ</sup>なとりでから一歩  
も外に出ようとはしていなかつ  
たということだ。それで、わが軍<sup>ぐん</sup>  
が引くと、メレクも安全<sup>あんぜん</sup>なその  
すきにと、そそくさと撤退<sup>てつたい</sup>してし  
まったというわけじゃ。

ブラッドフォード<sup>きょう</sup>卿よ、時<sup>とき</sup>がた  
てば、村人<sup>むらびと</sup>たちも、わたしに信  
頼<sup>らい</sup>していれば物事<sup>ものごと</sup>はうまくいく  
のだということが分かるであろ  
う。それがすぐに分かる者<sup>もの</sup>も  
いれば、一生<sup>いっしょう</sup>かかる者<sup>もの</sup>もいる  
であろう。だが、わが民<sup>たみ</sup>はいつ  
もわが民<sup>たみ</sup>であることに変わ<sup>か</sup>りは  
ない。例えわたしを疑<sup>うたが</sup>うことが  
あっても、わたしは民<sup>たみ</sup>の願<sup>ねが</sup>いに  
こた<sup>こた</sup>えつづけるのだ。」



何か月も たったころ、王様が 村に やって来るといふ 知らせ  
が 来ました。村は、王様を むかえる 準備で お祭り気分です。  
王様が 到着すると、家々の 窓からは 国旗が、木々の 間には 横  
断幕が はためいていました。子供たちは、身近に 王様に 会え  
たのが うれしくて、歓声を あげていました。

王様は 馬車から みんなに 手を ふって ほほえみながら、ゆっ  
くり 村の 中の 広場へと 進んで行きました。王様が 女賢者の  
メイベルに 察した 表情で ほほえみかけると、彼女は ほおを 赤  
らめ、上品におじぎをしました。

ある人が 馬車に 向かって 走って来ました。お城の 守衛官、  
ミルフォードです。ミルフォードは ひざまずくと、声高に 言いま  
した。「王様！ われわれが 無事で 安心していただけるのは、一  
重に 王様のおかげです。はずかしながら、告白いたします。わ  
れわれが 包囲されている 時、わたしは 王様を 疑ってしまい、  
ほかの 者たちに 王様の 行動に 反するような ことまで 言ってし  
ました。心から おわび申し上げます。」

王様は 馬車から 降りると、ミルフォードを 立ち上がらせ、だ  
きしめて 言いました。「すべて、ゆるされた。大切なのは、お主  
らが わが助けを 求め、そして 村が 救われたということじゃ。  
友よ、たとえ わたしを 疑うことが あっても、わたしは いつでも、  
わが民を こよなく 愛する、うそいつわりの ない お主らの 王な  
のだ。」

さて、この お話は ここで 終わります。王様が 取った 行動に  
ついて、いつまでも ぶつぶつ 言う 者は いましたが、大部分の  
村人たちは、王様の 行動が 村人たちにとっても 村全体にとつ  
ても 最善であったと 分かりました。村人たちが どのように 考えた  
に せよ、王様は 常に、自分の 愛する 民を見守り続けたのです。



お  
終  
わ  
り

文：ピーター・リンチ 絵：ディディエ・マーティン デザイン：ステファン・ミーラー  
出版：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2014年、ファミリーインターナショナル  
“Sir Bradford” s Ordeal, Part 2” --Japanese  
関連の読物はこちら⇒ 祈り、信仰、子供のための物語